

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02265

研究課題名(和文)江戸歌舞伎における年代記資料の基礎的研究

研究課題名(英文)The fundamental research of Edo Kabuki chronicles

研究代表者

光延 真哉 (MITSUNOBU, Shinya)

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：70586388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：従来の歌舞伎研究において十分活用されてこなかった、『役者名声牒』『続名声劇場談話』『続芝居年代記』という三点の「年代記」資料の翻刻を行ない、その成果物として2017年2月に翻刻集を刊行した。当該分野における資料の面での研究環境の整備に寄与するとともに、こうした「年代記」資料が作られる江戸時代における文化的背景を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We deciphered three Edo Kabuki chronicles, "Yakusha homare cho", "Zoku meisei gijoh danwa", "Zoku shibai nendaiki", which have not been fully utilized in the conventional study of Kabuki. We published the document collection of these chronicles in February 2017. By introducing them we assisted the preparing of the Kabuki research environment, and revealed the cultural background of Edo era to the production of such materials.

研究分野：日本近世文学

キーワード：歌舞伎 江戸 年代記 劇書

1. 研究開始当初の背景

(1)歌舞伎研究に際して把握しておくべき基本的な事柄に、上演に関わる情報がある。すなわち、何年何月のどこの劇場で、誰作の何という作品が上演され、どの役者がどの役を演じたか、そしてその作品がどのような内容で、演劇史上何か特別な出来事があったのかどうか、という情報である。一回一回の興行では今日のポスターやプログラムに類する「番付」と呼ばれる印刷物が発行された。そこに記載の情報を集積すれば良いのであるが、膨大な量の番付を逐一確認するのは大変な作業である。そこで、こうした情報を一元化し、長期的な流れを俯瞰できるような著作物が江戸時代からまとめられてきた。そうした資料を、歌舞伎研究では「年代記」と総称する。

(2)今日、当該分野で広く知られ、基礎文献として頻繁に活用されている「年代記」に以下がある。

『歌舞伎年表』…伊原敏郎編。永禄2年(1559)～明治40年(1907)を対象。

『歌舞伎年代記』…江戸の芝居を対象とし、次の正篇・続篇・続々篇の三書がある。

- ・『花江都歌舞伎年代記』…談洲楼焉馬編。寛永元年(1624)～文化元年(1804)を対象。
- ・『花江都歌舞伎年代記続編』…石塚豊芥子編。文化2年～安政6年(1859)を対象。
- ・『続々歌舞伎年代記 乾巻』…田村成義編。安政6年～明治36年を対象。

『劇場年表』…関根只誠編。寛永元年～天保5年(1834)の江戸を対象。

『江戸芝居年代記』…編著者未詳。寛永元年～文政2年(1819)の江戸を対象。

(3)これらに対して、本課題で主に採り上げる次の三点は、一部の研究者には既に知られていたものの、必ずしもその知名度は高くなく、これまで十分に活用されていなかった「年代記」である。

『役者名声牒』

門田候兵衛編か。明和7年(1770)刊。享保元年(1716)～明和7年の江戸を対象。1933年10月発行の『演劇学』第二巻第三号において秋葉芳美が全文を翻刻し、さらに、同年12月発行、同誌の第二巻第四号では「役者名声牒訂正増補」が掲載され、同資料の誤謬を正すとともに各種の情報が追加されている。活字が掲載された『演劇学』が稀観誌であることが、本資料が活用されていなかった理由であると考えられる。

『続名声劇場談話』

編著者未詳。写本。三巻。『役者名声牒』の続編を意図し、明和元年～文政2年の江戸を対象とする。守随憲治が国立国会図書館蔵本(以下、国会本)を底本とし、1934年から1936年にかけて『演劇学』誌上に翻刻するが、安永元年(1772)までで中絶している。これまで唯一の伝本と考えられていた国会本の文字が難読であることが本資料の利用されてこなかった理由であるが、国会本を写した新出本が研究代表者の光延の架蔵するところとなり(以下、光延本)また、早稲田大学演劇博物館にも伝本(以下、演博本)があることが判明した。この二本を参考とすることで国会本の判読は容易になる。

『続芝居年代記』

編著者未詳。写本。四巻。文化6年～文政4年の江戸を対象。国会図書館に所蔵されるが、(2)で挙げた『江戸芝居年代記』の一部として登録されているために見過ごされてきた。研究分担者の倉橋が2003年に紹介、翻刻も発表しているが、一般に手に取りづらい媒体であるためか、研究者の間では十分に知られていなかった。

2. 研究の目的

(1)従来の歌舞伎研究において十分に活用されてこなかった、『役者名声牒』、『続名声劇場談話』、『続芝居年代記』という三点の「年代記」資料の翻刻を行ない、それを発表することで、当該分野における資料の面での研究環境の整備を行う。

(2)その上で、「年代記」資料を総合的な見地から研究対象とし、従来情報源の一つとしてしか見なされてこなかった「年代記」を、ある種の「作品」として捉え直すことで編者の文学的営為を探っていく。

3. 研究の方法

(1)『役者名声牒』、『続名声劇場談話』、『続芝居年代記』の翻刻作業を行うことを研究の第一ステップとした。

『役者名声牒』

光延が担当し、桑原(研究協力者)、小池(研究協力者)が点検を行って翻刻の精度を高めた。

『続名声劇場談話』

桑原が担当し、光延、倉橋、齊藤(連携研究者)、小池が分担して点検を行い翻刻の精度を高めた。

『続芝居年代記』

倉橋が担当し、桑原、小池が点検を行って翻刻の精度を高めた。

翻刻にあたっては、本課題参加メンバーを

集めての打ち合せを数度開催し、翻刻方針の調整、難読文字の解読等の作業を行った。また、翻刻集出版に際しては、研究代表者が所属する東京女子大学の学生に索引作成の補助作業を行ってもらった。

(2)研究の第二ステップとして、上記三点以外の「年代記」資料も含めた総合的な見地から、こうした資料が生まれた文化的背景の究明や、文学史的意義の考察等の検討を行なった。考察に際しては本課題参加メンバーを集めての研究会を数度開催し、意見交換を行なった。

4. 研究成果

(1)研究の主な成果

2017年2月に新典社より『未刊江戸歌舞伎年代記集成』と題した資料集を刊行した。同書は上記の『役者名声牒』『続名声劇場談話』『続芝居年代記』の三書の翻刻と解題、および名題索引を収録したものである。

これら三書の成立背景、特徴、文学史的意義等について次のような点をそれぞれ明らかにした。

『役者名声牒』

「年代記」資料の嚆矢に位置付けられるが、役者の当り芸を編年的に列挙して彼らの「名声」を讃美するという意図のもとで編纂されたため、後続資料のように各劇場の各興行を網羅的に収録したものではない。書型や文体の面で同時期に行われた洒落本の形式が踏襲されており、八文字屋が刊行する役者評判記や劇書に対する強い対抗意識が窺える。

『続名声劇場談話』

書名に表れるように『役者名声牒』の続編を企図したものであるが、その編集方針は同書と異なり、各劇場の各興行を網羅的に記録する。名題、配役といった基本情報のほかに、台本が現存しない作品のあら筋が掲げられたり、劇場の火事による焼失と再建や仮芝居のいきさつが記されたりなど、他の文献に見られない知見を得られる点が貴重である。歌舞伎研究者の必携の書である伊原敏郎編の『歌舞伎年表』は典拠が明記されていない記事があるという点で使用には注意が必要な文献であるが、調べてみると、実はこの『続名声劇場談話』を典拠としていることが判明する例も見受けられる。

『続芝居年代記』

名題、配役等の基本情報のほかに、作者間のトラブルや改名の事情といった劇界の内情、あるいは上演に際しての演出の詳細など、他の文献に確認できない記事を有する点が貴重である。また、本書と同時期成立の類書である石塚豊芥子編の『花江都歌舞伎年代記続編』と合わせ比べることで、当時の芝居愛好者や好事家の歌舞伎文化への接し方を考

える上での好材料となるとともに、本書の旧蔵者である貸本屋の好文堂が幕末期の劇界のパトロンであることから、本書のような年代記資料と劇場関係者との関わり合いを想定することも可能である。こうした点で、単なる記録物以上の示唆に富んだ資料と言える。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

歌舞伎研究に際して最も基本的な資料であるこうした「年代記」資料を、解題や索引まで付した、手に取りやすい形で提供し、広く研究者の利用に供することで研究基盤の底上げにつながる。

我が国の文化に国際的関心が寄せられる昨今、歌舞伎という芸能が果たす役割は大きいと、とりわけ海外の日本研究者が歌舞伎という文化に触れるきっかけとなるのが、江戸時代の役者を描いた浮世絵（役者絵）であろう。アメリカのボストン美術館の例を挙げるまでもなく、充実した浮世絵コレクションを有する機関は我が国よりもむしろ海外に多い。役者絵を研究する際に欠かすことができないのが、その絵が、何年何月に上演された、何という役者の何という役を描いたものなのかという考証である。その際に必要となってくるのが興行記録であるが、現在海外で主に使われている伊原敏郎編の『歌舞伎年表』は、情報の充実度、正確性に問題がある。

国外研究者は、くずし字の解読や物理的距離など、江戸時代の一次資料の閲覧に際して大きな困難が伴う。そうした研究者にとって、学術的に信頼のおける基本情報を、活字という手に取りやすい形で提供できたことは歌舞伎研究のみならず、国際的に裾野が広がる浮世絵研究にも資するところが大きいと言える。

(3)今後の展望

役名索引の作成

歌舞伎は、先行作品に様々なアレンジを加えながら書き替えることで新たな作品を生み出していく。台本が現存しない作品も含む「年代記」での役名索引が完成すれば、これまで埋もれてしまっていた作品同士の関係性が明らかになるなど、いまだかつてない大きな恩恵を与えてくれるであろう。

当初計画ではこの役名索引の作成・公開を視野に入れていたが、その作業が想定をはるかに越えた膨大なものになることが判明し、本課題では断念せざるを得なかった。歌舞伎研究に大いに資するところであるので、実現に向けて今後も模索していきたい。

複数資料間での横断的分析

「年代記」資料の情報が、番付・役者評判

記・浮世絵等の周辺資料とどのように関わるのかについて、個別事例をより詳細に検討することによって、「年代記」資料、あるいは周辺資料の情報の正確性を測ることができる。すなわち、歌舞伎資料のテキスト・クリティークにつながり得るのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

光延真哉、団十郎提携時代の金井三笑、国語と国文学、査読有、第93巻第10号、2016、pp.17-34

[学会発表](計1件)

光延真哉、ゼロ年代歌舞伎研究の一事例、招待講演、歌舞伎学会、2017

[図書](計1件)

倉橋正恵、桑原博行、小池章太郎、齋藤千恵、光延真哉、新典社、未刊江戸歌舞伎年代記集成、2017、966

6. 研究組織

(1)研究代表者

光延 真哉 (MITSUNOBU, Shinya)
東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号：70586388

(2)研究分担者

倉橋 正恵 (KURAHASHI, Masae)
立命館大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：90425017
(平成27年10月22日より平成28年11月3日まで、および平成29年10月11日より研究協力者)

(3)連携研究者

齋藤 千恵 (SAITO, Chie)
園田学園女子大学・近松研究所・客員研究員
研究者番号：00368010

(4)研究協力者

小池 章太郎 (KOIKE, Shotaro)
跡見学園女子大学・文学部・元教授

桑原 博行 (Kuwahara, Hiroyuki)
早稲田大学・演劇博物館・招聘研究員